

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5年 11月 3日

氏名 太齋 慧

所属 臨床心理学 コース

指導教員名 能智正博

1. 研究課題 スティグマを生きる成人期ゲイ男性のライフストーリーおよびポジショニング—支援的な対話に
むけて—
2. 報告する学術活動の実施期間 令和5年8月7日 ~ 令和5年8月11日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に :

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

| | |
|---|-------|
| 学術活動区分 (①～⑩を記入) | ④国際会議 |
| <p>【活動種別】 研究発表 【発表種別】 口頭 【会議名】 40th Annual International Human Science Research Conference 【予定年月日】 2023年8月7日～11日(発表日:8月8日) 【会場】 神奈川県平塚市 東海大学湘南キャンパス 【発表題目】 Life stories and stigma coping strategies of adult gay men over time 【発表内容概要】 ゲイ男性のメンタルヘルスの問題は自殺企図等様々な指標において明らかになっている。その背景として同性愛者であることに対するスティグマが指摘されるが、当事者がどのようにゲイであることを意味づけスティグマに対処しているかは明らかでない。発表者はこれまでに成人期のゲイ男性を対象に、同性愛者としてのライフストーリーを検討し、ゲイであることの意味づけやスティグマへの対処方略の類型を検討してきた。語りに伴走する心理支援においては、そうした意味づけや対処方略が時間とともにどのように変容し得るか理解することが有用である。 本発表では、ライフストーリーおよびスティグマ対処方略の経時的な変容のあり方について検討した。具体的には、セルフスティグマを受け止めつつも現在も苦しんでいると語る「受け止めの語り」という語りの類型に着目し、協力者2名のライフストーリーの縦断的なインタビューデータについて、スティグマの否定的影響やそれへの対処方略がどのように変容するか、およびそうした変容に関連する要因がどのようなものか検討した。分析手法として、ポジショニング理論(Harré & van Langenhove, 1999)や対話的自己論(Hermans & Kempen, 1993)を参照した。 分析の結果、ゲイとしての自分を承認する他者や、楽しみを共有する他者から成る自己内世界が広がっていくことで、多数派的な「正解」への囚われが緩み、今この瞬間のポジティブ感情への注目が高まる過程が示された。セルフスティグマを遠ざける自己呈示のパターンとして、否定的な見方を社会の側に外在化するパターンと、自己内の力に着目するパターンが見出された。自己に対する集団主義的な視点、個人主義的な視点はともに文脈によって個人に統制感をもたらすと考えられたが、それが可能に成る条件については更なる検討を要する。</p> | |

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

セクシュアルマイノリティの自己概念やスティグマというテーマを対話的自己論やポジショニング理論の観点から理解するという、新規性のある視点を様々な国・分野の研究者に発信し、そこから議論を行うことができた。どのような分野の対人支援の対象にも含まれるであろうセクシュアルマイノリティ当事者の経験の質についての理解を国際的に発信することができたと同時に、多様なフィードバックを得ることができ、自らの研究への視野を広げることができた。例えば、ゲイ男性へのスティグマの特徴や、自己内対話のプロセスの非直線性について質問を受け議論を行ったことで考察を深めることができた。

他に自身の研究課題につながる成果としては、本発表に取り組むことで、成人期ゲイ男性がセルフスティグマと距離を取るプロセスや自己呈示について明らかにすることができた。具体的には、承認的な他者との自己内対話が広がり外的な規範よりも自分の感情に焦点が向くようになるというプロセスの属性や、スティグマの外在化や自己に内在する力への着目を通した自己呈示を行うことでスティグマと自己に距離ができることが明らかになった。これらは、今後非当事者との対話がゲイ男性当事者にとっていかにして支援的になり得るかを明らかにしていく上で重要な知見となる。